

## アジア地域の学校教育における ESD ネットワークの構築と日本の学校教育への示唆 —UNESCO アジア地域の学校における ESD ワークショップへの参加を通して— Points to be considered for the Promotion of ESD in Formal Education, based on the Participation into UNESCO ESD International Workshop in Asia

建元喜寿 \*1、佐藤真久 \*2、工藤泰三 \*1、中島陽子 \*3、大川絵美 \*4  
Masahisa Sato, Taizo Kudo, Yoshikazu Tatemoto, Yoko Nakajima, Emi Okawa

\*1: 筑波大学附属坂戸高等学校、\*2: 東京都市大学環境学部、  
\*3: 岡山市 ESD 世界会議事務局、\*4: 国際協力機構(青年海外協力隊)

\*1: Senior High School at Sakado, University of Tsukuba、\*2: Tokyo City University、

\*3: UNESCO World Conference on ESD Promotion Bureau, Okayama City

\*4: JICA Japan Overseas Cooperation Volunteers

[要約] 本稿は、2013年6月に開催された「グリーンスクールアジア地域ワークショップ—持続可能な未来のための教育」に参加をした筆者らによる、本会合への参加報告と、インドネシアの学校教育における環境教育プログラム(ADIWIYATA)を紹介するものである。さらには、筆者らにより本会合で発表された日本の取組事例を紹介するとともに、本会合の参加を通じた日本におけるESDの充実と展開にむけた示唆を述べる。

[キーワード] アジア地域、学校教育、環境教育、持続可能な開発のための教育(ESD)

### 1. はじめに

アジア地域の公教育における ESD の充実と、教師能力開発、連携体制強化を目的として、2013年6月27-28日かけて、「グリーンスクールアジア地域ワークショップ—持続可能な未来のための教育(Green Schools Regional Workshop, Educating for a Sustainable Future)」(以下、本会合)が、インドネシア、ジャカルタで開催された(主催、UNESCO、韓国国際協力機構)。本会合は、学校における環境教育・ESD 関連のプログラムの国際的動向や取組事例、UNESCO 関連施策を踏まえ、学校における ESD 実践の充実にむけた議論を深めるものであった。日本からは、高等学校における「総合学科」の設置・活用と、ESD 実践において大きな経験を有する筑波大学附属坂戸高等学校の教諭、ESD 世界会議推進局の岡山市職員、インドネシアのマカッサル市における環境教育に関する巡回指導を通して環境教育実践の質の向上と地域連携を深めている青年海外協力隊、東京都市大学教員らとともに参加をした。本会合には、環境教育をインドネシア・

バンジャルマシン市全体で推進をしている市行政担当者と学校教師・生徒、UNESCO ジャカルタオフィス担当クラスター各国(インドネシア、マレーシア、ブルネイ・ダルサラーム、東チモール、フィリピン)政府担当者<sup>1</sup>、専門家、政府担当者、国際協力機関、ASEAN 事務局、UNESCO、等からなる約 130 名が出席し、国際的動向とアジア太平洋地域の関連施策、国別関連プログラム、各国事例、インドネシア国内の優先テーマにおける教育実践計画の策定と共有・議論、がなされた(図 1)。



図 1: 全体会合における日本の取組事例発表風景

## 2. 本会合における議論(概要)

2012年における国際ワークショップに基づき(詳細は、佐藤・建元・工藤・吉田、2013を参照)、2013年度の会合では、各国の学校現場における実践報告(日本、韓国、フィリピン)のほか、インドネシア・バンジャルマシ市における地域全体の取組の紹介、組織間調整と政府対話に関する議論が中心に行われた。第一日目の会合では、まず、ポスト 2015 開発アジェンダにおける ESD と EFA のシナジーの構築、導入としての学校における環境教育活動と地域連携などの重要性が、UNESCO ジャカルタ事務所所長から指摘がなされ、その後、ASEAN 環境教育行動計画との整合性と東南アジア地域における学校における環境教育活動の継続的な推進について報告がなされた。その後、インドネシア政府が展開するエコスクール・プロジェクト(ADIWIYATA、大きな智の泉)が紹介された。市単位における実践事例については、インドネシアのバンジャルマシ市全体で実施されている環境教育実践活動概要が、副市長により報告がなされた。そして、バンジャルマシ市の学校における実践事例については、主として、水保全、エネルギー保全、森林保全、廃棄物管理に関する環境教育実践活動が報告された。いずれの取組も、知識や技能獲得を目的としたものではなく、地域における実際的な行動実践、態度変容を目的とした事例が多くみられ、地域人材の効果的活用や保護者の巻き込み、学校全体による取組、参加と対話の場づくり、既存教科への関連活動の織り込み、児童生徒の主体的な参画によるキャンペーンの実施、手工芸品の作成、地域のマーケットを活用した環境調査、演劇や音楽の効果的に活用による学びの構築と情報発信、学校菜園づくりなどによる生産活動、などの事例報告がなされた。その後、国際的な実践事例として、日本(後述、筆者:工藤、建元、中島、大川)、韓国、フィリピンの事例が共有された。第二日目の会合では、組織間調整と政府対話に関する議論が中心に行われた。ブータンのユネスコ国内委員会・教育省からの「世界幸福度指数

(GNH)」の紹介、教師教育機関のネットワーク化と教育施設の効果的活用(SEAMEO-INNOTECH)、国際理解教育・地球市民性に関する取組(APCEIU)ほか、日本の事例として、国立教育政策研究所の研究プロジェクト「学校における ESD」の一環として行われた国際比較研究と、(1)持続可能な社会づくり構築概念、(2)ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度、(3)ESD の視点に立った学習指導を進める上での留意事項(国立教育政策研究所、2012)、が筆者(佐藤)より報告された。

## 3. インドネシアのエコスクール(ADIWIYATA)

インドネシア政府環境省は、JICA の協力により、2004 年に教育文化省、内務省、宗教省とともに、環境教育政策について取りまとめている。同政策では“環境質の保全と向上に積極的に参加する知識及び技術を持ったインドネシア国民を育てる”ことをビジョンとして掲げている。当該政策の具体化に向けて、2005年に環境省と教育文化省はMOUを締結し、2006年から、ADIWIYATA(大きな智の泉)という、学校における環境教育・ESDプログラムが開始された。“ADI”は“大きい、良い、理想的、完璧”を意味し、“WIYATA”は“知識、規律、社会の倫理を学ぶ場所”を意味している。本取組は、小・中・高校の環境教育活動を評価し、毎年6月5日の環境の日に、大統領が最優秀校10校を表彰する環境教育プログラムである。活動目的と内容は下記の通りである(表1)。

表 1:ADIWIYATA の活動目的と内容

- **目的(1):**環境にかかる知識及び文化に関する学校の方針を確立する—**活動内容:**ビジョン・使命、具体的な環境教育プログラム、人材育成計画、資源保全や清潔・公衆衛生に関する計画、予算
- **目的(2):**環境保全に配慮したカリキュラムを開発する—**活動内容:**複数の教科にまたがる教育モデル、教育方法・教材
- **目的(3):**環境保全活動への参加を促す—**活動内容:**課外教育プログラム、学校外での活動
- **目的(4):**環境保全にかかる各種施設の設置・管理を行う—**活動内容:**各種プログラム実施のための施設、学校内の環境管理のための施設、水や電気の節約、廃棄物の管理

#### 4. 関連テーマに関する事例報告(日本)

##### 4. 1. 筑波大学附属坂戸高校の取組

筑波大学附属坂戸高等学校(以下、筑波大坂戸高)では、国内での活動とともに国際教育の活動においてもESDを展開しており、本会合で同校教諭である筆者ら(建元・工藤)により国際的なESD活動の4事例が紹介された。まず、第1の事例は「日本とインドネシアの高校生の協働による3Rプロジェクト(2010年度トヨタ財団アジア隣人プログラムの助成による)」であった。ポストMDGsの時代は、世界に共通する問題について、お互いが学びあい知恵を出し合い問題を解決し、持続的な社会を実現していく時代であると言えよう。このプロジェクトで、両国に存在する身近な「ゴミ」問題に焦点をあて、高校生自らが問題点を抽出し解決にむけた活動を行った事例が紹介された。第2の事例は「国際問題を学ぶための機能的クリップ教材」であった。世界各国の人々がともに学んでいくためには、言語を超えて学びあえる教材が必要となってくると言える。現在、筑波大坂戸高は、宮城教育大学および東京都市大学を協力校として、写真を用いた教材開発と教材を活かした教育実践に取り組んでいる。生徒たちは、写真教材から様々な意味を読み解き、環境問題をはじめとする世界で発生している多くの問題に気づき、その発生原因や現状、またその解決方法を考えることができる。本教材は、第4の事例(後述)において、複数国や地域の高校生が一同に集う場面でも試行され、各国の生徒や教員から評価を得ている。第3の事例は「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」であった。筑波大坂戸高では3年次に「卒業研究」を必修科目として設けており、生徒は各自テーマを持って研究活動を行うが、その中で国際的課題に取り組むため海外での調査活動をしたいと希望する生徒に対し、現地への渡航費を援助するものである。2008年に開始して以来29名の応募者のうち8名を海外へと送り出してきた。生徒が海外で調査活動を行うためには、現地の協力者、およびその協力者と生徒・教員をつなぐ協力者

の存在が不可欠であり、このプログラムはESD・国際教育活動において人と人とのつながりが非常に重要であることを示す一例と言えよう。第4の事例は同校で2012年度に実施した「高校生国際ESDシンポジウム@坂戸・つくば2012」であった。これは同校が交流の実績を持つ東アジア4か国・地域の計5校から生徒・教員を招待し、同校および筑波大学において参加生徒がそれぞれの国での環境問題に対しどのように取り組んでいるかを発表しあい、その内容について議論を行ったというものであった。この中で生徒たちは、扱う問題はそれぞれの地元の問題であっても、それを異なる地域で生活する者と共有することにより、個々の生徒が多角的な視野を持つことができ、またその問題が他の地域ともさまざまな形で関連しているということを実感できたようであった。

ESDの展開において国際的な活動が有意義である理由としては、生徒たちの地球的な視野、そして異なる文化(あるいはその文化を持つ人々)に対する寛容な態度を涵養することができるということが挙げられる。現在の社会、そしてそこで起こっているさまざまな事象が色々な形で、そして国境を越えて関わりあっていることを認識し、かつ異文化を受容しさまざまな人々と手を取り合っただけでなく、地球的課題について主体的に考えることができる生徒を育てることが、国際的なESD活動に期待されている。

##### 4. 2. 当該国における青年海外協力隊の取組

本会合ではインドネシア地方都市で急速に進む開発における環境問題への取組問題として、南スラウェシ州マカッサル市の教育局に派遣中の隊員(大川)による事例が紹介された。隊員が市内小学校を対象に行っている出前授業と、巡回先学校の教師を集めて運営されている教師のための環境教育フォーラムについて紹介された。人口140万人を抱える同市において廃棄物問題・埋立や伐採による自然環境破壊が散見されるが将来を見据えた開発が行われているとは決して言い難い現状である。またゴミのポイ捨ての多さも特徴であり、大人から子供まで道路や川、海

にゴミを投棄することに疑問をもっていないことも多い。市民にとって同市に対する所有者意識が非常に低いと、自身のごく身近な周辺環境以外に対しては責任を感じることは珍しい。しかしながら同市内において環境教育としてはゴミの分別指導等しか行われておらず、それすらもあまり浸透しているとは言い難い現状である。このような現状で行われている隊員による出張授業においては、生徒が自分たちの街や国に対して所有者意識を持てるような、生徒が積極的に参加できる教材を用いての授業実施の重要性が伝えられた。特にインドネシアにおいては体験型学習の機会が少なく、詰め込み型学習がメインであるため体験型学習は生徒にとっても新しく興味を引き付けやすくなっている。また環境教育を行う教師の経験不足も教育実践上での弊害となっていたことから解決策として同市において設立された、教師のための環境教育フォーラムについても紹介された。環境教育の教材が不足している中、他校の教師同士が環境教育の意見を交換し、よりよい教材開発をすることが目標とされている。市内の多くの学校で質の高い環境教育授業が行われるように、まずは教師の能力の改善が望まれている。

#### 4. 3. ESD 世界会議推進局の取組

岡山市は 2014 年に行われる愛知・名古屋での「ESD 世界会議」に先駆けて 10 月～11 月に開催される「ステークホルダー会議」の開催地である。岡山は地域に密着した ESD の取組が評価され、2005 年に国連大学により認定された RCE (グローバルな地域拠点) のひとつである。「ESD 世界会議推進局」では、会議に向けての準備や、ESD 国連の 10 年 (DESD) 後も ESD がより一層推進できるような仕組みづくりや支援を行っている。地域と連携した ESD の取組や「岡山型一貫教育」について紹介がなされるとともに、「ESD 会議」の開催周知と岡山の小学校における ESD の取組紹介が行われた。「岡山型一貫教育」については、「タテ」(幼・小・中・高) の連携と「ヨコ」(地域) の連携を重視して取組が紹介された。本連携の取組は、「岡山っ子育成条例」を通してバック

アップがなされており、地域(家庭・学校・事業者・地域・公民館等)が連携して自立する子どもを育成することを目的とした条例として機能をしている。また、「コミュニティスクール」の取組についても紹介がなされ、中学校区をひとつの単位として、地域のみならず子どもを見守るシステムを紹介された(29 中学校区・151 校、全体の 76% が加盟)。続いて、ASP.net スクール(ユネスコスクール)の ESD の取組 2 事例(水辺の学校－岡山市立第三藤田小学校、つば網体験学習－岡山市立小串小学校)が紹介された。地域社会では、少子化が進み、その地域自体の持続可能性も含め地域が抱える課題は大きいと言えよう。その地域ならではの素材(農業・漁業)を活用し、地域の大人が協力して体験活動を支える。また、その体験活動を通して、世代を超えたネットワークが広がったり、地域への愛着を深めたりするとともに社会や地球のこれからのみんなで考える好機として取り組んでいる事例として紹介がなれた。岡山市ではこのように中学校区を単位としてユネスコスクールへの登録を薦めており、現在、17 校が認定されており、2014 年には 50 校がユネスコスクールとなる予定である。さらに、教育委員会やユネスコスクールの大学間支援ネットワーク(ASP.Univ.net)校である岡山大学とも連携をしながら、地域とともに ESD を推進している中学校区に対して、体験活動や資料購入のための予算措置と教員研修や出前授業などを通して ESD 活動の支援をすすめている状況が報告された。

#### 5. 考察－本会合からの学び、日本における更なる充実・展開にむけた意味合い

本会合への参加に基づき、日本の学校教育における ESD の推進・充実にむけて、筆者らにより、下記に配慮事項が抽出された。

##### 5. 1. 「学校全体アプローチ」としての意味合い

- ESD 活動は、ある 1 つのテーマに焦点を当てて行うとしても、そのテーマには多くのことが関わりあっており、1 人の教員がすべてを企画・運営することは難しい。できるだけ多くの教員が活動に関わることによって、活動をリードする側も多面的視野を持つことが肝要である。

- ある程度の規模を持つ学校においては、すべての生徒を1つのESD活動に巻き込むのは困難である。その場合は、すべての生徒が少しずつできる活動(書き損じはがきの回収、エコキャップ運動など)を展開する、あるいはあるグループの活動を校内で広く公開する(文化祭での発表活動、冊子の作成・配布など)などの方法が考えられる。
- ## 5. 2. 教育課程の編成・実施
- 教員免許には担当教科が記載されているが、「ESD担当教員」というのはもともと存在しない、いや、見方を変えれば全員が「ESD担当」なのである。このことを念頭に置き、各校においては管理職がリーダーシップを発揮し、進学・就職指導一辺倒の教育から脱却し、これからの社会づくりについて主体的に考え行動できる人材を育成するために学校としてどう取り組むべきなのかを全教員で議論できる環境を作ることが重要である。
  - 全国では、ESDに関する先進的な取組を行っている学校が多数存在しているが、必ずしもそれらの取組が共有されているとはいえない。ESDの重要性とともに、先進事例をどこの学校でも共有できるよう、事例のデータベース化やキーパーソンとコンタクトを取ることができるシステム作りも重要である。
  - ホームルームの時間や「総合的な学習の時間」に限らず、各教科の授業においても各教員がESD的視点を持ち、その授業の内容が将来の持続的な発展が可能な社会づくりにどう結びついていくのか明確な意識を常に持って授業を行うべきである。そのためには、教科枠を超え、さまざまな教科の知見を共有しながら議論する土壌が各学校に求められる。
  - 既存の教科・科目のみならず、学校設定教科・科目を積極的に導入することによって、生徒がESD活動に接する機会を増やすことができるとともに、学校としても「本校はESD活動を積極的に推進しています」ということを外部に対してアピールすることができる。このことがひいては外部のさまざまな人々や諸団体とのつながりを生むことに発展する。
  - 総合学科高校には、原則履修科目として「産業社会と人間」がある。この科目は、通常1年次の正副担任が担当する場合が多い。このため必然的に複数の教科の教員が担当することになる。総合学科高校では「産業社会と人間の時間」に、生徒は将来の進路や自己の夢や社会とのかかわりを考えながら、2・3年次における科目を選択する。総合学科高校はESDを推進していく拠点校になる可能性を秘めていると言えよう。
- ## 5. 3. 学校管理・運営における教育諸条件整備
- ESDについてはまだまだ発展途上の段階であるため、世界会議を最終年にしないでむしろスタートとし、教育全体の底上げがしていく必要がある。
  - ESDに取り組む教員個人の資質に頼る部分が多い。また、ある特定の教員のみが取組となっているところが多く、なかなか取組に広がりを持たない現状がある。ESDに詳しい教員の転勤に伴い、立ち消えとなってしまうこともよくある。今後は、教員個人の資質に頼らない組織的なアプローチや、記録等による経験の共有が必要とされている。
  - ESDの捉え方について今一度教職員への周知を図るとともに、文部科学省初等中等教育局からの働きかけや他省との連携を伴う国としてのESDの取組も必要である。
  - ジャンルの偏りも見られ、どうしても「ESD=環境」の図式があるため、他領域でも取り組める場づくりや経験の共有が必要とされている。
  - 施策としてのトップダウンと地域と連携したボトムアップのバランスが必要とされている。
  - 学校や自治体をあげて取り組むような組織的なものに広げていくことで定着を図ることが重要である。本会合におけるグリーンスクールの取組は、組織的展開を検討する際に参考になるアプローチであった。
- ## 5. 4. 学校・家庭・地域社会等の相互連携協力
- 学校は他の施設・組織と比べ、物理的条件に加え人々のつながりという側面から見ても、ESDにおける地域の拠点として考えられるべきである。学校を中心として、学校から各家庭へ、そして地域社会へと情報発信し、地域全体で情報を共有することで、地域全体で社会づくりに取り組んでいくことが可能になる。
- ## 5. 5. 地域ネットワークの構築と国際連携
- [4. 1]でも述べたように、ESDにおける国際的活動を実施する意義は大きい。費用の問題は常について回るが、各省庁とその各機関、地方自治体およびその各機関、学術機関、各財団、NGO、NPOなどと広く連携を構築し、生徒に国際的活動を経験させることはとても価値のあることである。
  - 今回のユネスコの会議のような場で、各国の学校現場での事例を共有できることは、経験の共有だけではなく、新たなアイデアや国際ネットワークが生まれる可能性を秘めている。今後とも、定期的に各国の教員が交流できる場の確保が重要である。
  - 現在JICA青年海外協力隊制度では、アジアのみならずアフリカ・大洋州・中南米にも環境教育を専門とする隊員が多く派遣されている。このような現在派遣中の隊員、また任期終了後に帰国した隊員が関わっていた地域と、それらの

隊員が派遣されていた国の学校・地域と日本の学校等が交流を持てる機会が広がると「今地球規模で起きている問題が自分とは無関係のものではない」という意識を双方が確認できる可能性が広がると考えられる。

## 5. 6. その他

- これから社会を持続発展可能なものにしていくためには、これからの社会を担う若い世代の人々に、一人一人が諸問題について主体的に考え行動することができるようになるための機会を提供していかなければならないが、従来の「点が取ればいい」「いい(=往々にして「有名な」と同義)進路先に進めればいい」という教育ではそれは実現できない。その実現のためには、なんとと言っても教師が変わらなければならない。「私は英語の教師だから…」と言って語彙や文法、読解や表現の指導をしていけばよい時代は終わった、ということを経験養成の段階で教師志望者にしっかりと伝えていく必要があるのではないだろうか。
- 高等学校は「環境教育の空白の3年間」ともいわれており、とくに進学校においては、ESDに関する活動があまり行われていないことは明白である。自己の進路と社会との関連について高校生にしっかり考えさせたいと、進路を選択させることが、持続的な社会を実現していくために大変重要である。学校では、教科の学習の時間以外にも、ホームルーム、校外学習(修学旅行)、文化祭、面談、部活動など様々な場面がある。教科でESDの実施が難しい場合は、学校の様々な行事などを活用することも良いだろう。

## 註

<sup>1</sup> 本会合の開催前日(2013年6月26日)には、UNESCO ジャカルタクラスター国(東チモール、インドネシア、フィリピン、ブルネイ・ダルサラーム、マレーシア)におけるESD 国別政策進捗レビュー会合が開催された。とりわけ、環境教育を中心とした政策発表(ブルネイダルサラーム)、文化、女性能力の強化、ライフスキルとの関連性が強い政策発表(インドネシア)、カリキュラムへの統合と持続可能な生産と消費に関する教育政策(マレーシア)、持続可能な開発に関する政策統合と災害リスク削減(DRR)、学校外教育、などを包括的、戦略的に実施している教育政策(フィリピン)、基礎教育・科学教育としての位置づけ(東チモール、資金的脆弱性)などの事例が共有された。東南アジア各国のESD 関連施策は、政策面では、大きな進捗が見られているものの、今後、自治体の取組との関連強化や、実践面の支援メカニズムの構築が不可欠である。本会議では、各国・地域的文脈の反映、政策を行う具体的な方法論について議論が深められた。筆者(佐藤)は、アジア太平洋地域の教育政策に

関するレビューアーとして出席をし、今年3月に開催されたポスト2015国際開発アジェンダに関する教育世界会合(セネガル・ダカール)、今年5月に開催されたポスト2015国際開発アジェンダにおけるESDの役割と機能についての会合(タイ・バンコク)の議論成果に基づき発表がなされた。論点として、教育・開発・環境アジェンダのリンケージ、国際指標の機能、EFAとESDのシナジー効果、持続可能性の概念に関する再構築(地球資源制約のもとでのEFAとESDのシナジー効果)、質のある教育と学習、価値・行動・態度を重視したスキル(non-cognitive skills)、個人・組織・市民能力の向上を目的とした連携と協働、先進国と途上国とがともに学び合う「地球市民性(global citizenship)」、UNESCOが主導すべき文化政策と持続可能な開発との整合性の確保、などが指摘された。

## 参考文献

- 国立教育政策研究所、2012、『学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究、最終報告書』、国立教育政策研究所。
- 佐藤真久・建元喜寿・工藤泰三・前川哲也・吉田賢一(2013)「東アジア地域の学校教育におけるESDネットワークの構築と日本の学校教育への示唆—UNESCO 東アジア地域の学校におけるESDワークショップへの参加を通して」、『日本環境教育学会関東支部年報』、日本環境教育学会、第7号、pp.37-42. ISSN1881-8668.
- Sato, M. 2013. ESD in the Post-2015 Development Agenda, based on the Global Meeting of the Thematic Consultation on Education in the Post-2015 Development Agenda “The World We Want 2015” in UNESCO, 2013, 2013 ESD Country Report Meeting, Sub-regional Dialogue on Policy and Practice, *Handout Materials*, unpublished.
- Sato, M., Goto, M., Okamoto, Y. and Kadoya, S. 2013. Japanese Case Study, NIER’s Study on ESD in Formal Education, in UNESCO, 2013, Green Schools Asia Regional Workshop, Educating for Sustainable Future, *Handout Materials*, unpublished.
- Nakajima, Y. 2013. Come and Visit Okayama in Autumn 2014, in UNESCO, 2013, Green Schools Asia Regional Workshop, Educating for Sustainable Future, *Handout Materials*, unpublished.
- Tatemoto, Y. and Kudo, T., 2013. Practices of High School Students’ International ESD Activities, UTSS and Other High Schools in Asia, in UNESCO, 2013, Green Schools Asia Regional Workshop, Educating for Sustainable Future, *Handout Materials*, unpublished.
- Oikawa, E., 2013. The Effort to make School-Community Linkages on ESD, in UNESCO, 2013, Green Schools Asia Regional Workshop, Educating for Sustainable Future, *Handout Materials*, unpublished.